

水を活用する町づくり（三重県長島町）

三重県長島町立長島中部小学校 中谷 実

1. 水と闘ってきた人々

濃尾平野に位置する「水と歴史の町」長島町は、木曾三川（揖斐川、長良川、木曾川）に囲まれた南北に12kmの細長い町である。長い年月をかけて、三川の河口部に運ばれた土で中州ができ、そこに住んだ人々によって、集落や耕地を洪水から守るための堤がつくられた。全体を囲むようにしてつくられた堤防（輪中堤、下図参照）により結ばれた共同体は、「輪中」（わじゅう）と呼ばれている。

長島町と水との関わりは、江戸時代の薩摩藩士による宝暦治水、明治時代のオランダ人技師ヨハネス・デ・レーケによる河川改修、昭和34年の町全体が壊滅的な被害を受けた伊勢湾台風、治水・利水・環境で話題を呼んだ長良川河口堰等に代表されるように、水との闘いの歴史であったと言える。

帝国書院『小学生の地図帳(最新版)』p.32

現在では、伊勢湾台風以降、台風時の高潮被害を防ぐ高潮堤防がつくられ、町の安全が保たれている。長島町の多くは、上図の断面図からもわかるように、海拔0m以下である。堤防の上から海面を見ると、はっきり海面下であることがわかる。そのため、雨水等を排水する排水機場が、町内の各地に設けられている。

町内を歩くと、水と闘ってきた人々の知恵にふれることがで

きる。川底から土を浚渫（しゅんせつ）し盛り土をしたり、石垣を積んだりしている家が、たくさん見られる。少しでも高いところに家を建て、水害から身を守ろうとしてきたことがよくわかる。



2. 肥沃な土地と豊かな海を利用して

三川により運ばれた肥沃な土地を利用した農業もさかんである。町内には、トマトのビニルハウスがたくさんあり、甘くてみずみずしい「ハウスももたろう」が年間を通してつくられている。また、昔からの「なたね」の産地であった伝統を生かし、食用の「なばな」として新芽の部分を取獲し、冬の間の緑色野菜として、全国に出荷している。



また、川と海に囲まれているため、昔から漁業も盛んである。河口の汽水域に生息する「しじみ」は、味もよく、たくさんとれる。冬の間には、海苔の養殖のための竹の杭が海一面に並ぶ。豊かな海からとれる海苔は、良質で味がよい。巻き寿司やおにぎりには、最高である。

3. 観光とレジャーの町へ

長島町の南端には、巨大なホテルとレジャーランドがある。世界一のジェットコースター「スチールドラゴン」や豊富な湯量を誇る天然温泉は、全国的に有名である。週末には、県外からも大勢の観光客でにぎわいをみせている。平成14年には第二名神高速道路が開通し、交通の便がさらによくなり、多くの観光客を迎え入れている。

長島町は、厳しい水との闘いの歴史から、水を活用した「水と湯の郷」をめざした町づくりへと変わろうとしている。

〔参考資料〕『水と湯の郷 ながしま』（長島町役場建設部企画課）